

水稻品種キヌヒカリの早植における栽培法

1. 試験のねらい

良食味米の水稻品種キヌヒカリの早植での安定栽培法普及を目的に、栽培特性、収量性及び品質等について検討した。

2. 試験方法

試験は栃木農試水田（厚層多腐植質多湿黒ボク土）において、平成2年～3年の2カ年間実施した。品種はキヌヒカリで、両試験年次とも5月9日に稚苗を移植し、1株本数は4本で、水管理は移植後30日から間断灌水とした。

各年次の試験条件は次のとおりである。

- (1) 平成2年 基肥窒素 3、5、7Kg/10a 栽植密度 20.8、23.8株/m²
穂肥時期 出穂前20日、15日
比較コシヒカリ、基肥窒素 3Kg/10a、栽植密度 23.8株/m²、穂肥出穂前15日
- (2) 平成3年 基肥窒素 3、5、7Kg/10a 栽植密度 22.2株/m²
追肥時期 出穂前30日、25日、20日
総追肥窒素量 6Kg/10a（基肥窒素 5 Kg区のみ総追肥窒素量 4 Kg区を設定）

3. 試験結果および考察

- (1) キヌヒカリはコシヒカリに比べ稈長短く耐倒伏性は優ったが、穂数が確保しにくく、基肥窒素レベルを上げる必要があると判断された。また穂発芽しやすく、倒伏が1.5以上になると玄米中の発芽粒増加による玄米品質の劣化が懸念された。（図-2）
- (2) キヌヒカリは総粒数と収量・倒伏の相関が高く、また穂数と総粒数の相関も高いので、倒伏を1.5以内に抑え、収量を向上させるには穂数は380～400本/m²、総粒数34,000～36,000粒/m²で収量は640～680Kg/10a程度が適正生育量と判断される。（図-3、4）
- (3) 栽植密度は、収量にはあまり影響しなかったが、m²当たり20.8株では穂数が少なく、また稈長が伸びやすかったので、22.2株程度は必要である。（データ略）
- (4) 基肥窒素7Kgでは穂数が410本/m²以上となり倒伏が増加し、同3Kgでは穂数が340～380本/m²程度で総粒数が少ないことから、基肥窒素は4～5Kg程度が適当である。（図-1）
- (5) 穂肥時期は、穂肥が早いほど穂数・1穂粒数が多く、総粒数が確保しやすかったが、基肥窒素5Kgの場合、出穂前30日の早期穂肥では倒伏開始が早く玄米中の発芽粒が増加したことから、同25日程度が適当と判断され、穂肥窒素量は2～3Kgを2回程度施用する（図-1）。なお出穂前30日の生育量が草丈60cm、茎数620本/m²、葉色4.0以下の場合は穂肥時期をさらに早める（出穂前30～25日）。

4. 成果の要約

水稻品種キヌヒカリの早植での安定栽培法について検討した。同品種はコシヒカリに比べ、稈長が短く耐倒伏性には優れるが、穂数が確保しにくい。また穂発芽しやすく、倒伏が1.5以上になると発芽粒増加による玄米品質の劣化が懸念された。キヌヒカリの早植における適正生育量は穂数380～400本/m²、総粒数34,000～36,000粒/m²、収量640～680Kg/a程度、倒伏1.5以下と判断され、基肥窒素4～5Kg/10a、穂肥時期は出穂前25日程度で穂肥窒素量2～3Kg/10aを2回程度施用するのが適当であった。

（担当者 作物部 福島敏和・山口正篤・小林俊一・鈴木正行*） *現小山農業改良普及所

